琵琶を聴きながら

口差点（こうさてん）

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」で始まる『平家物語』。高校生のときに冒頭の部分を暗記して古文の授業で発表した際、言葉に詰まって赤面した記憶がよみがえります。

４月下旬、安曇野市穂高の碌山美術館が主催する碌山忌で、薩摩琵琶の演奏会が行われました。奏者が語る「祇園精舎の…」に合わせて、琵琶の独特の悲しい音色が会場を包み、演奏が始まりました。

琵琶の音を聴きながら、以前、車に乗って数人で九州旅行をしたことを思い出しました。関門海峡を渡る手前で中国自動車道からいったん降りて、壇ノ浦古戦場跡公園に寄りました。周防灘を見下ろすと、潮目が時間とともに変わり、行き交う船のスピードも変わる様子が分かりました。この潮目の逆転で平家は敗れ去ったと言われています。

演奏会では平家の栄枯盛衰が「耳なし芳一」として語られました。また、演目の一つに「文覚発心」もありました。平安末期から鎌倉時代にかけて武勇を誇った遠藤盛遠が、袈裟御前をあやめて仏門に帰依するくだりなどが、哀愁の琵琶の音に乗って耳に心地よく響いてきました。

奏者は、お話の中で「琵琶の音は鎮魂の意味を持つ」と教えてくださいました。琵琶は正倉院宝物の中にあるので日本古来の楽器と思っていたのですが、発祥の地はペルシャとのことです。奈良時代には日本に伝来していたことを知り、びっくりしました。良いひとときを過ごすことができました。

（安曇野市穂高、荻原義重、79歳）